

第二次世界大戦における米国の戦略とリーダーシップ 二正面戦略をめぐる問題

ウィリアムソン・マーレー

はじめに

米国が世界的に優位に立っており、軍事力だけでなく文化までもが世界中に広がっているこの時代に、第二次世界大戦という大きな時代区分を超えて、大戦前の米国の政治形態の戦略的見方や姿勢を想起することは困難である¹。1939年当時の米国は、その後の60年間を生き抜いた今日の人々にとっては極めて奇妙な時代のように思われる。一方で米国は大国であり、しかも経済的には既に超大国であった。他方、米国民の大多数は、自分たちは世界の他の諸国から完全に孤立していると考えていた。太平洋と大西洋という広大な大洋によって「旧き世界」の諸悪から守られている「新たなエルサレム」という神話が、米国人の世界観 (*Weltanschauung*) に確実に定着していた。

より正確には、米国文化は相変わらず偏狭そのものであった。同国の大都市がいかに立派に見えたにしろ、大半の米国人は、少なくともその思考様式においては未だに小さな農場や町で生活していたのである。どちらかと言えば、世界恐慌の深刻な影響は、1920年代の米国人の孤立主義を強化させた。米国は、西半球を例外として世界情勢に関与すべきでないという信念が国家組織に深く根付いていた²。このような姿勢がまさに1941年12月7日に至るまで多くの米国人の思考を規定していたのである。

このように1939年の米国の戦略状況には、現在と比較すると際立つ3つの側面がある。第一は、1930年代後半にアジアや欧州で勃発した種々の恐るべき紛争に中立の立場を維持することが米国にとってもっとも利益になるばかりでなく、そうした姿勢こそが道徳的にも求められるものであると固く信じていた。第二に、米国の軍事力は世界中に広がりつつあった恐ろしい戦争に対して、少しばかりの役割りを果たす準備が明らかに整っていなかった。その戦闘能力から見て米国陸軍は、世界的にはボリビアやウルグアイと同一レベルであり、配備可能な軍事力は最低限のものに留まっていた。確かに米国海軍は相当な再軍備プログラムを開始したが、それは、米国と他の諸国との間の「防壁」

¹ 本論の大部分は、オハイオ州立大学教授アラン・R・ミレット博士と共同執筆した第二次世界大戦の歴史に関する著書からの引用が多い。詳しくは、Williamson Murray and Allan R. Millett, *A War To Be Won, Fighting the Second World War* (Cambridge, 2003) を参照。第二次世界大戦の戦略的枠組みというテーマにさらに関心のある読者は、Gerhard Weinberg, *A World at Arms, A Global History of the Second World War* (Cambridge, 1997) も参照のこと。同著は、対立する両陣営の戦略を考察した好著である。

² この情勢には少しばかりのアイロニーが含まれている。なぜなら、ほかでもない世界情勢の中での米国政府の孤立主義こそが、世界恐慌という破滅的状况を招いた大きな要因だったからである。

を維持したいという孤立的願望の表れであった³。第三は、米国経済は大恐慌から徐々に抜け出しつつあったが、米国が4年以内に世界最大の海軍力及び空軍力、そして巨大な陸軍力を構築し、同時に、英国とソビエトに戦争を継続させる武器及び原材料を大量に供給することでこの両国の戦争支援をするだけの力を備えるとはおよそ思えなかった。

1930年の米国の戦略的意思決定手段は、やはり米国が迫り来る世界大戦に主要アクターとして参戦するとは思えない程度のものであった⁴。米国海軍は、日本との戦争の可能性を明らかに重視したが、大西洋で再度ドイツ海軍Uボートと戦う準備は、思想的にも物質的にも重視されていなかった。他方、陸軍の戦略的見解は統一されていなかった。ドイツ軍との戦いの可能性を考えた者もいれば、米国の海岸線を防御することに固執する者もいた。陸軍の準備態勢がお粗末なことから極東での米国の権益を放棄することに賛成する論者さえいた⁵。大多数の軍人は、世間の荒波から隔離された生活を送り、米国社会とはかけ離れていた。国務省には、戦略問題について情報を得たり、助言したりする方策がなかった。コーデル・ハル国務長官（この人物は頭から爪先まで完全に19世紀型人間であった）は、戦略と米国の軍事力の問題に対処するより道徳的宣言をすることに関心を示したように思える⁶。未だに大体当てはまることを考えると驚かないことであるが、戦略的課題についての調整はほとんどなく、ましてや米国の政策への全体的な戦略的枠組みの議論はなされなかった。しかしながら、このような状況はフランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領の12年にわたる在任期間中の政府運営と極めて一致するものであった。

結局、戦略は個人の問題を超えている⁷。個人の欠点及び強みの相互作用はもとより、地形、外的要因、文化、歴史的影響、偶然が絡む複雑な相互作用のプロセスである⁸。紙幅の制約のため本論では、米国の戦略策定に関する戦略的リーダーシップとプロセスを、ルーズベルトとその2人の軍事顧問（ジョージ・C・マーシャル陸軍大将とアーネスト・J・キング海軍大将）の3人の相互関係によって考察する。その目的は、多大な犠牲を

³ 1938年、ルーズベルト政権と議会は、とりわけ米国とその重要な権益に対する種々の脅威に対応するための戦艦・航空母艦に関する大規模建艦プログラムを認可したが、こうした権益は、主として西半球から他国の勢力を締め出すことと定義されていた。

⁴ 第二次世界大戦前の米国の戦略的意思決定機関（またはその欠如）と、そして戦争終結までにこうした機関が最終的に統合参謀本部制度 - 今日の米国の戦略的意思決定システムの原型 - へとどのように発展していったかを理解するには、Mark A. Stoler, *Allies and Adversaries, The Joint Chiefs of Staff, The Grand Alliance, and U.S. Strategy in World War II* (Chapel Hill, 2000) を参照。

⁵ Stoler, *Allies and Adversaries*, pp. 5-7.

⁶ 1940年7月に英国政府が日本政府の圧力に屈してビルマルートを閉鎖した時、ハルは英国の姿勢を反道徳的と非難したが、英国大使に日本が軍事力を行使してビルマルートを閉鎖したら米国政府はいかなる支援をする用意があるのかを問われて、満足な回答ができなかった。1940年夏の英国の戦略的に絶望的な状況を考慮すれば、こうした道徳的説教は身勝手極まりないものであった。

⁷ Williamson Murray, MacGregor Knox, and Alvin Bernstein, *The Making of Strategy, Rulers, States, and War* (Cambridge, 1994) を参照。

⁸ 戦争史家の中でもっとも偉大なトゥキユディデスはその著書『ペロポネソス戦争』の歴史で常に強調しているように、戦略の策定を含んだ人間に関連する出来事に対する偶然の影響力を決して過少評価すべきでない。

ともなう第二次世界大戦という舞台に放り出された後、米国が唯一の勝利者として登場することになった相互作用と意思決定を時代を追ってたどることである。

戦略とは、とりわけ戦争の圧力と条件のもとでは静止した枠組みではなく、むしろ流動的な流れ、自己の希望と画策と同程度に敵の行動によって影響されることの多い流れである。戦時に米国の戦略政策立案者たちがとった行動が事前に考え抜かれたものであった、とあまり考え過ぎないように注意しなければならない。多くの場合、彼らは「戦争は困難の選択肢である」という事実と直面した⁹。それにもかかわらず、クラウゼヴィッツが強調するように「戦争は、政策の一行為に過ぎないだけでなく、真の政治的手段、他の手段による政治的活動の継続である¹⁰。」そこで、『戦争論』を言い換えると、戦争を手段として達成しようと意図すること、そしていかにして戦争を遂行するのかということが頭の中で明確になっていない限り、だれも戦争を開始すべきではない。正気であればなおさらのことである¹¹。米国の採用した戦略が、その弱さとともに強さを引き出したのは目的と戦争の遂行方法が明確であったからである。

1941年12月に米国が第二次世界大戦に参戦した時、同国は一連の達成目標（簡単に言えば、ナチス・ドイツ、大日本帝国及びファシスト・イタリアを徹底的に打ち負かすこと）を明確にすることができる特異な立場にいた¹²。米国がこのような目標を決定したのは、主として欧州とアジアの現状を打破しようとしたこれら3ヶ国の行動であった。こうした目標を達成するために米国は、経済全体を動員し、太平洋と大西洋にわたって膨大な軍事力を展開しなければならなかった。実際、近代史において二正面戦争に勝利した国家は、米国だけであった。これに成功したのは、主として1939年から1944年の間に展開された戦略のおかげであった。偶然と幸運が米国の成功に大きな役割を果たしたこともあれば、先見の明と優れた軍事力が成功をもたらしたこともあった¹³。加えて、ルーズベルトとマーシャルが既に米国の参戦前に明確に表明した戦略は、20世紀末に至るまでも、米国の戦略政策立案に多大な影響を及ぼすことになるのである。

⁹ 1759年、フランス領カナダを征服した英陸軍少将ジェームズ・ウォルフ卿が、アブラハム平原で勝利した戦闘の直前に発した言葉とされている。この戦いで彼は戦死した。フランス軍を北アメリカから追い出すことになったケベックを背にしたウォルフの軍事作戦に関する輝かしい物語については、Fred Anderson, *Crucible of War, The Seven Years' War and the Fate of Empire in British North America, 1774-1766* (New York, 2000), pp. 310-311, 317, 342-363 を参照。

¹⁰ Carl von Clausewitz, *On War*, translated and edited by Michael Howard and Peter Paret (Princeton, 1976), p. 87.

¹¹ Ibid, p.579.

¹² したがって、同様に1980年代と1990年代のサダム・フセイン政権の無責任かつ偽りの行為は、ジョージ・W・ブッシュ政権に2003年春、イラクのバース党を排除するための軍事行動をとらせた。この戦争の背景については、Williamson Murray and Robert Scaler, *The Iraq War, A Military History* (Cambridge, 2003) の第1章を参照。

¹³ これはトゥキディデスとクラウゼヴィッツがともに、当然強調したと思われる事実である。トゥキディデスの歴史は絶えず運命の女神「テュケ」に言及している。クラウゼヴィッツは、「戦争ほど広く、絶え間なく偶然に縛らた人間の活動はほかにない。そして、偶然という要素によって推量や幸運が戦争において大きな役割を果たすようになる」と解説している。Clausewitz, *On War*, p. 85.

ルーズベルト及び米国の戦略プロセス

歴代の米国大統領の中でフランクリン・ルーズベルトは、歴史家にとって、ある特定の問題で大統領の見解を実際に判断するのが極めて難しい人物である。確かにかつてない有能な政治家であるが、手の内を見せないためルーズベルトはほとんど何も記録を残さなかった。部下への指示のほとんどが曖昧であった。時折、自身の魅力と気持ちの良い確約で相手を説得しようとしたし、またある時は、自分の側近中の側近に対してさえこれと正反対の態度をとった。ルーズベルトは、自分が接するすべての人物を実に巧妙に操った。ほとんどすべてに関して彼は優れた政治家であった。

しかしながら、戦略の輪郭を明確に策定しようとする者たちにとってルーズベルトは、腹立たしいまでに曖昧であった。ルーズベルトの性格と知性について米国の偉大な法学者オリバー・ウェンデル・ホームズは、1920年代にある会議の後、この将来の大統領を次のように実に的確に評した。すなわち、「知的には二流、しかし気質は一流¹⁴。」そして、戦力策定において結局のところ、知性より性格が重要なのである¹⁵。

ルーズベルトは1933年3月に米国大統領に就任したが、当時米国は、史上最大の国内危機に見舞われていた。経済問題を除いてルーズベルトは、可能な範囲内で米国を見舞った政治危機を克服することができた。米国が大恐慌を克服するのは第二次世界大戦の影響を待たなければならなかったが、それは、米国が来るべき大戦に関与することになった理由ではなかった。この経済危機の性質ゆえにルーズベルトは、外交問題に取り組む時間がほとんどなかった。しかし、たとえもっと外交に力を注ぎたいと思っても、米国の一般国民には孤立主義の姿勢が深く根付いていたので国際舞台で活動する余地はなかった。ルーズベルトは、ドイツの新たなナチス政権に深い疑念を抱いていた。幼年時代を両親とともにドイツで過ごしたことからドイツ語に堪能なルーズベルトは、大統領就任最初の年にアドルフ・ヒトラーの演説の原本を要求した。ルーズベルトは、国務省が作成した翻訳を信用していなかったのである¹⁶。翻訳者の手によって罵倒や悪意に満ちた表現が削除されていない原本を読んで、ルーズベルトはドイツの目的に深い疑念を抱いた。

大統領は、欧州やアジア地域で拡大している国際危機に対し、米国民の姿勢と信念を考慮しながら政治的に可能なことを見極める本能も備えていた。とりわけ、国民の大多

¹⁴ James MacGregor Burns, *Roosevelt: The Lion and the Fox* (New York, 1956), p. 157.

¹⁵ この点について、ウィリアム・ジェファーソン・クリントンとジョージ・ウォーカー・ブッシュとの相違は、とりわけ外交政策の分野ではそれほど明確ではなかった。

¹⁶ ここに、現在の米国務省と諜報機関へのメッセージがあるが、その中に関係者が翻訳版が必ず手に入ると信じているため外国語の知識が軽視されていると書かれている。国務省の翻訳者たちが、演説や文書の問題箇所を取り繕おうとしてひどい表現、不快な言葉を取り除こうとしていると、ルーズベルトは本能的に理解していたのである。著者はこの見解について、フランクリン・D・ルーズベルト図書館の前館長ウィリアム・エマーソン博士に負うところが大きい。

数が中立もしくは反対の姿勢をとっている紛争に米国を巻き込んではいないと確信していた。1861年春のリンカーン大統領のようにルーズベルトは、米国の政策を統一する手段を提供するため自らの将来の敵に頼らなければならなかった。そして、ついに米国の将来の敵は、南北戦争において南部諸州が1861年4月にサムター基地を砲撃したように、米国の「十字軍」を正当化する口実を提供したのである。その時までルーズベルトは、米国内の亀裂が調整不可能なまでに拡大するのを防ぐため、帆を調節し、曖昧な水路を海図に記さなければならなかった。

したがって、1930年代後半のルーズベルトは前進しては、世論が尻込みすると引き返す、という行動を繰り返した。彼にとって、また大多数の米国人にとって英国軍とフランス軍は、ドイツ軍を撃退できるほど強力な軍隊であるように思われた¹⁷。ドイツ軍がその弱い軍事及び経済基盤から抜け出せる可能性はないように見えた。ルーズベルトとその顧問たちは、地球の反対側で日本軍が完全に中国での苦戦に巻き込まれているため、アジアにおける米国の重要な権益は少なくとも当面、相対的にはそれほど危険でないと確信していた。そこで米国政府は、とりわけ大統領が3期目を目指して大統領選に立候補すると決めた後、比較的慎重な政策を採択したのである。

しかしながら、1940年4月から6月の間に国際環境は一変した。ルーズベルトは、政治的危険がいかなるものであれ、米国の戦略的前提条件を抜本的に再検討しなければならなかった。ナチス・ドイツがフランスと欧州の大半を征服したことは、米国自身にとっても明らかに真の危機であった。ここでルーズベルトは、米国の政治的背景が許す範囲で断固とした行動に出た。一方で米国は、既に米国各地の造船所で行われている大規模な艦隊建造計画を補強することに加えて、効果的な陸軍と空軍の設立という事業に着手しなければならなかった。

米国の戦略変更の第二の側面は、試練を迎えている英国を有効に支援するという問題と関係があった。この戦略変更は当初、海軍と陸軍の双方から激しく反対された。最初、ルーズベルト自身は英国軍がドイツ軍の猛攻撃に耐えることができるかに関して強く疑問を抱いていた。したがって1940年6月から7月の間、ドイツ軍が英国本土の征服に成功した場合、英国艦隊をカナダに退避させることを保証するようチャーチル英首相に求めた。チャーチルとしては、米国に圧力をかけて相当な支援を提供させる手段として、

¹⁷ (少なくとも1938年9月のミュンヘン会談まで) 実際の勢力均衡の思慮ある分析に基き、フランス軍と英国軍がドイツ軍を撃退可能と考えた米国の戦略的知恵のかなりの程度の顕在化である。1939年秋までも、1940年春になっても、決定的軍事作戦を行うドイツ第三帝国の軍事力に深刻な影響を与えることのできるいくつかの選択肢が英国軍とフランス軍にあった。この流動的な戦略状況の分析及び第二次世界大戦に貢献するに際して英国及びフランスの指導者が犯した過ちについては、Williamson Murray, *The Change in the European Balance of Power, 1938-1939, The Path to Ruin* (Princeton, 1984), Williamson Murray, "The Role of Italy in British Strategy, 1938-1939," *Journal of the Royal United Services Institute*, 124 (1979) を参照。1939年秋に連合国が犯した戦略的過ちに関するより最近の分析については、Reynolds M. Salerno, *Vital Crossroads, Mediterranean Origins of the Second World War, 1939-1940* (Ithaca, 2002) を参照。

ドイツが英国海軍の艦艇を手にする可能性を示唆した。結局、1940年夏の英国の軍事行動、すなわちアルジェリアでのフランス艦隊に対する攻撃、そして「バトル・オブ・ブリテン」での勝利が、ルーズベルトに英国が最後までドイツに抵抗することを納得させたのである¹⁸。

これは、米国の再軍備を支える上で喉から手が出るほど必要な「余剰兵器」を英国軍に提供することに対する米国軍人の反対を和らげるものではなかった。「基地・駆逐艦交換協定」や1940年秋に始まる英国への銃及び弾薬の移送を好意的に見る者は陸軍省にも海軍省にもほとんどいなかった。それどころか、ジョージ・C・マーシャル大将を含んだ軍関係者の見解は、英国軍は敗北するであろうし、英国に出荷したものはすべて失うことは避けられないというものであった。

また、欧州の戦争は太平洋の戦略環境況に多大な影響を及ぼした。ここでルーズベルトは、明らかに戦争を回避したいと願ったが、同時に軍事面において米国の権益だけでなく連合軍の権益も守ることを考慮していた。問題は、米国政府内に日本軍を抑止するために米国がとるべき手段を明確に理解している者がいないことであった。1940年夏に日本軍が北部インドシナを占領し、英国にビルマルートを閉鎖するよう圧力をかけた時、対日戦争開始に気乗りのしない米国はそれを傍観した。しかしながら、米国では日本の軍事力を過小評価する意見が優勢であったこともあり、真珠湾がどれほど無防備かを理解していた米国の戦略家はほとんどいなかったし、実際、主力戦艦をその無防備な真珠湾に展開させる措置を講じたのである。

1940年の最後の数ヶ月の段階では、(英国は例外と考えられるが)事実上すべての諸国は、戦略的にいくつかの選択肢を持っていた。だが1941年の末までは、米軍にとっては将来への道が明確に現れる一方で、ドイツ軍と日本軍は完全な敗北と破壊への道を選択していた。ルーズベルトからすれば、当時命運をかけた戦略的問題はナチス・ドイツの問題であり、ナチス・ドイツは1941年夏の大半は、今にもソビエト連邦を敗北させ、欧州の覇権を確立しそうに思えた。ルーズベルトの2番目の戦略的問題は、太平洋や欧州で米国の前に立ちはだかっている戦略的現実を認識することを、多くの米国人が忌諱していることであった。

1941年7月の米国議会での採決ほど、これら2つの戦略的・政治的課題が絡み合っているかを如実に現したものはない。ドイツ軍の先頭が既にモスクワとレニングラードへの道程の3分の2まで進み、ウクライナ地方に深く進入している時、大西洋で米国海軍艦艇がドイツ海軍Uボート相手にまさに本格的な戦争に突入しようとしている時、そして、太平洋では戦争か平和かの瀬戸際であった時に、米国議会はたった1票差で徴兵

¹⁸ 1940年夏の全般的な戦略状況については、Murray and Millett, *A War to Be Won*, pp. 83-90、英国軍のアルジェリア攻撃については特に、Warren Tute, *The Deadly Stroke* (New York, 1973)を参照。

制の継続を可決した。世論は、「米国民の 68%が参戦しないことより英国を支援することの方が重要であると考えているが、79%は参戦を望まないこと、また、70%が「ルーズベルトは」やりすぎた、または、英国のために既に十分やったと感じている」と表明していた¹⁹。有権者の気持ちがこのように混乱しては、ルーズベルトの態度が煮え切らないように見えたのも不思議でない。

日本の一部の戦略家たちが、日露戦争(1904年～1905年)時の帝政ロシアのように、数発の強烈な打撃を与えれば政治的に分裂した米国の戦意を失わせることができると確信したのも無理はない。米国の権益に対する脅威が姿を現しつつあるにもかかわらず、国内の分裂に直面したルーズベルトの気持ちは動揺しているように見えた。つまり、ルーズベルトは米国軍を戦争に駆り立てることなく枢軸国側に挑戦するという曖昧なコースをとった。とはいえ、大西洋における米国の行動は特筆に価する。すなわち、米国戦艦はアイスランドまで巡航し、駆逐艦は西大西洋で輸送船団の護衛を引き継いだのである。1941年7月初旬、海兵隊の一旅団がアイスランドの防衛を引き受けた。こうした行動は、ドイツの海上戦を指揮していたエリッヒ・レーダー海軍司令長官を大いに刺激し、このため彼はドイツ軍Uボート艦隊司令官であるカール・デーニッツ海軍大将を伴ってベルヒテスガートン(Berchtesgarden)までおもむいた。彼らの使命は、ヒトラー大統領に対米宣戦布告を促し、ドイツのUボート艦隊が北米領海で作戦を遂行することを認めさせることであった。だがヒトラーは、東部戦線に完全に専心していたためこれを却下した²⁰。

皮肉にも、米国の対日政策はナチス・ドイツに対する政策ほど明確に対立的なものではなかったが、枢軸国側の運命を封じた1941年12月の出来事を早めるうえでより多くの成功を収めたことが判明した。日本軍の南部インドシナ占領に対する米国の反応は、日本を窮地に追い込むことなく日本に立ち向かうことを意図した。事実、ルーズベルトとその顧問は、禁輸措置の対象とすべき原材料のリストから石油を削除していた。しかしながら、このリストが発表された時、石油はリストに残っており、戦争への道は広く開かれた。それは、1940年の秋から冬にかけて、軍人にせよ民間人にせよ、すべての日本人が余りに軽率に走行した道であった。

1941年12月7日よりるか前に米国の政治及び軍事指導者は既に、米国がこの戦争でたどる戦略シナリオを作成していた。このシナリオが最初に記されている1940年11月12日付の文書は今日、その作成者が米国の明確な戦略的方向性に賛成したパラグラフ、すなわち、「パラグラフD」または「ドッグ計画」として知られている。米国の「グ

¹⁹ Eric Larrabee, *Commander in Chief, Franklin Delano Roosevelt, His Lieutenants, and Their War* (New York, 1987), p. 62.

²⁰ ヒトラーに対米宣戦布告を促がすためのドイツ海軍の努力に関する議論については、Murray and Millett, *A War To Be Won*, p. 248 を参照。

リン・ブック」シリーズの主要な戦争史研究者の一人であるルイス・モートンは、「[米国の]第二次世界大戦における戦略策定でおそらく最も重要な文書」としてこれに言及した²¹。この戦略的覚書の作成者、ハロルド・スターク海軍大將は当時、海軍作戦部長（CNO）の要職にあり、彼の主張は直ちに米国政府のトップに伝わった。

スタークは、英国を最大限に支援すべきと主張した。こうした支援には、海軍による支援ばかりでなく陸軍及び空軍も加わる必要があった。スタークは、現在の米国の軍事力を考えると、米国は日本と戦いながら同時に英国に大量の軍事支援を行うことは不可能であると主張した。実際、戦争になれば米国は、「太平洋では防御態勢を固持するのが精一杯」の立場に追い込まれるであろうと指摘したのである²²。海軍が第一次世界大戦後、対日戦争の準備に多大な努力を払ってきたことを考えると、この主張は米国海軍の上級将校の戦略的見解としては驚くべきものであった。しかし現在ここでは、スターク海軍作戦部長はドイツを優先する戦略に賛成していた。それは、来るべき米国政府上層部での戦略議論で、事実上すべての政策立案者、戦略家そして大統領自身が同意した選択肢であった。問題は、米国がドイツと、そして日本とも交戦中ではないことであった。

米国の国家的コンセンサスの欠如という政治問題を解決するには、真珠湾での日本海軍航空部隊の驚くべき戦術的・作戦的成功が必要であった。皮肉なことにまさにこの真珠湾の戦術的・作戦的成功が、日本にとって政治的及び戦略的災いであることが判明した。真珠湾は、日本の他の軍事行動では不可能であった程度に米国民を一致団結させた²³。そして、それから4日以内にアドルフ・ヒトラーが米国に宣戦布告した。そして、6月のドイツのソ連侵攻よりさらにひどい過ちであることが判明するのである。ヒトラーが宣戦布告した理由は、およそ推測することはできない。ただ、1941年12月の東部戦線で敗北が明らかになってきたことによる挫折感と、米国の力と軍事力に対する極度の無知が、ヒトラーを残っていた唯一の目標に向かって突進させるに至ったと推測できるだけである²⁴。

このドイツの過ちによってルーズベルトは、動揺する米国民にドイツ軍がこの災い全体で重要な役割を演じてきたと主張することができた。人種差別的衝動に駆られた米国民が喜んで受け入れた主張であったはずだ。しかしながら、米国が戦争に引きずり込ま

²¹ Louis Morton, *Strategy and Command, The First Two Years* (Washington, DC, 1962), p. 81.

²² Maurice Matloff and Edwin M. Snell, *Strategic Planning for Coalition Warfare, 1941-1942* (Washington, DC, 1953), p. 28.

²³ 真珠湾攻撃が米国民の意識に与えた影響については、平時の最後、そして戦争が始まって最初の「タイム誌」、すなわち、12月8日付（雑誌販売所の店頭には4日に置かれた）と12月15日付（雑誌販売所の店頭には11日に置かれた）を参照。前者は、起こるとわかっている戦争の準備が完全に整っている米軍を描いており、後者は、真珠湾攻撃で全く驚愕した米軍を描いている。

²⁴ ドイツが米国について、さらに欧州以外の戦略環境についていかに無知であったかは、1941年12月8日、ヒトラーがラステンブルグに集まった軍関係者に真珠湾の位置を尋ねた時、だれ一人として答えられる者がいなかったという事実が示している。ドイツ軍事史研究所を退官したドイツの戦争史家ホルスト・ブーグは、1980年、この事実を著者に教示してくれた。ドイツ海軍が熱狂的にヒトラーの決断を支持したのに対し、陸軍及び空軍が一言の反対も述べなかったことは特筆に価する。

れた方法、つまり真珠湾攻撃は、大統領に新たな戦略的問題をもたらした。真珠湾攻撃から生じた日本人への途方もなく、燃えたぎるような憎悪は、「ドイツ優先戦略」を推し進めたい米国政府や陸軍顧問にとって多大な政治的圧力となった。こうして、米国の戦略家がどれほど欧州に米国の軍事作戦的的を絞りたいと願ったとしても、常に、太平洋での米軍支援や対日戦争賛成の対抗圧力が存在することになった。

ジョージ・C・マーシャルとアーネスト・J・キング

ここで、4年にわたる戦争の中で米国の戦略的判断をもたらした討議と事実を理解するために2人の一流の軍事戦略家について言及する必要がある。一流の才能を見出すルーズベルトの鋭い洞察力が2人の人物の選出に決定的な役割を果たした。両者とも理由は異なるが、最高の軍事ポストに選ばれる当然の候補ではなかった。ミュンヘン危機の最中の1938年9月のルーズベルトとジョージ・C・マーシャルの初期の会議の一つで、新任の陸軍副参謀長マーシャルは、ルーズベルトの会議のまとめに対し素っ気なく次のように答えた。すなわち、「申し訳ございませんが大統領、私は全くそれに同意できません²⁵。」ルーズベルトが、このような正直一徹な人物を次の陸軍参謀長に任命したことは、ルーズベルトの性格を非常に良く物語っている。マーシャルは1939年9月1日にこの要職に就いたが、この日はドイツ軍がポーランドに侵攻した日であった。

マーシャルの同世代にはウエストポイント陸軍士官学校出身者が多かったが、彼はウエストポイント出身ではなく、バージニア陸軍士官学校 (Virginia Military Academy) という、西バージニア州の高台にある小さな士官学校の卒業であった。彼は、この士官学校で受けた教育では不十分だと感じていたので、自身が大きな弱点とみなすものを補うために、卒業後、生涯を通じて余人の及ばない熱心さで戦争史と軍人としての職業について読書及び研究に励んだ。彼が深く歴史を理解していた事実については、次のことを記せば十分である。マーシャルは1947年のプリンストン大学での講演で「少なくともペロポネソス戦争とアテネの衰退の時代について心の中で熟考しない人者が、今日、特定の基本的な国際問題について十分な知恵と強い信念を持って考えることができるかどうか」極めて疑わしいと思うと述べたのである²⁶。陸軍に入隊して間もない頃から、同僚はもとより上官までもマーシャルに畏敬の念をもって接していた²⁷。1916年、マーシャルの上官は、適性報告書の中で彼を戦時下で自分の部下にしたいと思うかという質

²⁵ Forest C. Pogue, *George C. Marshall*, vol. 1, *Education of a General 1880-1939* (New York, 1969), p. 323.

²⁶ W. Robert Conner, *Thucydides* (Princeton, 1984), p. 3.

²⁷ 唯一の例外は、ダグラス・マッカーサー将軍であったようである。マッカーサーは、陸軍参謀長であった1930年代初頭、マーシャルの出世を阻止するためにあらゆる手段を尽くした。

問に次のように答えている。「そう思います。ただし、私はむしろ彼の指揮下で仕えたい²⁸」と。

マーシャルは第一次世界大戦中に西部戦線で素晴らしい功績を挙げたため、ジョン・J・パーシング將軍の参謀長になっていた。第一次世界大戦後の彼の出世は、同世代の軍人と同様に、完全な年功序列に基づく昇進制度の下で停滞した。この時期のマーシャルの最も重要な任務は、陸軍歩兵学校の副校長を勤めた5年間であった。学校長が大いに自由裁量を認めたためマーシャルは自ら教授陣を選んだが、その中から少なくとも50名が第二次世界大戦中に將軍の要職に就くことになった²⁹。150名を超える将来の將軍たちが、マーシャルの在職中にこの歩兵学校で学んだ。悪名高いマーシャルの「メモ帳」、つまりマーシャルの目に留まった将校を書き留めたノートが登場するのはこの任務の時であった。素質を見抜くマーシャルの才能は、第二次世界大戦を通じて米国陸軍の有用性に著しい影響を及ぼすものであった。

偉大な指導者が全てそうであるようにマーシャルは、細部を見失うことなくより大きな課題を認識する能力を持っていた。マーシャルは1939年に参謀長に就任した時、既に50代半ばを過ぎていたが、新たな状況や難題に容易に順応することができた。彼は自身の個人的習慣、部下との関係及び世界を指揮するという重圧を担う能力について厳しく自己を規律していた。マーシャルは口数が少なく、自身が言葉や時間を浪費しないことを望んでいたため、他人にもそれを要求した。マーシャルの生活は清廉潔白そのものであった。お気に入りの気晴らしは、乗馬（これは毎日欠かさなかった）とガーデニングであった。彼は短気なところがあったが、鉄の規律でこれを律しており、滅多にないことではあったが、怒りが爆発するような場合はそれだけで、部下を恐れさせるには十分であった。政府の戦略的政策と常に一致していたわけではないが、結局、マーシャルは組織型の人物であったといえよう。

ほとんど全ての点でアーネスト・J・キング海軍大將は、マーシャルとは対照的な人物であった。米国の戦争史家アラン・R・ミレットは、著者との共著である第二次世界大戦の研究書の中で次のように記している。

[キングの]影響力は、ひとえに彼の専門知識と精神力から来るのであって、性格によるものではなかった。彼の崇拜者にして最も親しい同僚の一人、チャールズ・M・「サヴィ」クック・ジュニア海軍少将ですら、他の親友が単にキングを「彼ほど卑しい人物はいない」と表現するのに対して、キングは「行動する人者」とであると擁護するのが精一杯であった。

²⁸ Larry I. Bland and Sharon R. Ritenour, *The Papers of George Catlett Marshall*, vol. 1 (Baltimore, 1981), pp. 445-446.

²⁹ Pogue, *George C. Marshall*, vol. 1, p. 248.

キングは平時に2度にわたり海軍作戦本部長候補から外された後、大西洋艦隊司令を経てワシントンに戻り、海軍作戦本部長に就いた。彼には1つの使命があった。日本を壊滅することである。

キングは日本軍を滅亡させる人物として最適任者であった。彼は生涯を通じて敵を打破し、同僚を面喰らわせる訓練をしてきたのである。

海軍大將に昇進してもキングの行動は少しも良くならなかった。彼は、公然と部下を罵倒し自分の部隊を恐怖で支配、また、不適任者及び彼が魅力があり過ぎると考えた将校を厳しく批判した。彼は多量の酒とタバコ、そして目に余る浮気で妻と7人の子供を含め、自身の周囲の全ての人々の生活を惨めなものにしたのである。

しかしながら、キングに関するこの簡単な描写の最後でミレットが指摘するように、「彼は海上での戦いと事務処理に関するあらゆる局面に精通していたため、その性格にもかかわらず、困難な任務に次から次へと取り組んだ³⁰。」同様に、歴史家のエルチング・モリソンはキングについて、「冷徹かつ不動の落ち着きの背後にはある激しい精神が燃えていた。自己と軍務への絶え間ない献身が培った精神であった。そして、これらすべてが不屈（激しく、厳しく、冷酷で、また他の何かであるか、または、そう思われるようにさせることができる）、恐ろしいまでに不屈であった³¹。」

キングの人柄そのものが、ルーズベルト、さらに言えば他の全ての大統領がキングを海軍作戦部長や米艦隊司令長官（頭文字をとると極めて皮肉な「CINCUS艦隊」となる）の地位に任命する可能性を極めて低くしたのである。キングは、「困って苦しくなった時、彼らは（俺のような）くそ野郎を呼ぶのだ」と言ったとされる³²。しかしながら、総力をあげての戦いが極めて切迫していたのでルーズベルトは、性格上の欠点はどうであれキングに海軍を委ねた。少なくとも1941年に、この戦争を戦略的にもっと巧みに認識していたかもしれないスタークとは異なり、キングは海軍を立直す冷酷さと迫力を備えていた。

真珠湾攻撃の直後、大統領はスタークをキングに代えて、この戦争で米国に勝利をもたらす軍事戦略家集団を整えた。ルーズベルトは、海軍にはキングの他に活用可能な冷徹かつ精力的な指導者がいなかったため、彼を選んだのである。さらに、この新任の海軍作戦本部長はマーシャルと同様、素質を見抜く稀有な判断力を備えていた。陸軍のカウンター・パートとなるマーシャルのようにキングは、海軍指導者層に在って無能な人物を容赦なく排除し、自身の基準に達しない者を解雇、そして、実戦やキングの「ワシ

³⁰ Murray and Millett, *A War to be Won*, pp. 336-337.

³¹ Elting E. Morrison, *Turmoil and Tradition: A Study of the Life and Times of Henry L. Stimson* (Boston, 1960), p. 567.

³² 戦後キングは、本当にこう述べたのかと質問され、これを否定したが、同時に、確かに言いたかったとコメントしている。Larrabee, *Commander in Chief*, p. 153.

ントン帝国」という厳しい世界で有能であることが判明した人物を昇級させた。

キングは決して「ドイツ優先戦略」の支持者ではなかった。彼は、海軍の戦闘準備に大日本帝国との戦いを深く浸透させ、太平洋での戦争を引き続き支援した。長い伝統を通じて米国海軍には英国嫌いの流れが存在するが、これと完全に軌を一にするかたちで彼の米国の戦略に対する姿勢は、英国嫌いで強化されていた。そしてキングは、米英統合参謀本部での議論を通じて英国の動機及び姿勢に深い疑念を抱いた。実際キングは、英国が欧州で行動を起こさないのであれば米国は「ドイツ優先戦略」に転じる代案に訴えることを主張する米国側の急先鋒であり、強気かつ挑戦的な代表的論者であった。

米国の戦略の意思決定における驚くべき側面の一つは、両者の性格がかなり異なるにもかかわらず、キングとマーシャルが第二次世界大戦を通じて極めて仲良くやったことである³³。マーシャルは大いに称賛に値する。なぜなら、戦争の初期の段階で無理をしてまで敢えてキングとの親密な関係を築いたからである。間違いなくキングは、海軍は陸軍航空部隊はもとより陸軍の支援なくして太平洋で大規模な戦いを遂行できないことを理解していた。また、両者の間には共通の利害があった。これは大統領とも通じる利害である。すなわち、ダグラス・マッカーサー将軍を可能な限り米国政府から、そして米国の戦略策定から遠ざけることである。キングの太平洋における軍事作戦への頑固なまでの支持は、とりわけ 1943 年後半から 1944 年前半の間、ノルマンディー上陸作戦の条件、つまり、欧州進攻が打ち出されていた時にマーシャルとルーズベルトが対英関係の中で利用可能なカードを提供したのである。

現実世界における戦略 1942 年

クラウゼヴィッツは、彼の言う「机上の戦争」と「現実世界における戦争」を明確に区別している。理論上の戦争は、「全てが単純に思える。必要な知識は注目に値せず、戦略の選択肢は、高等数学の最も単純な問題に強度の科学的評価が備わっているのに比べて、極めて明確である³⁴。」クラウゼヴィッツは、さらにこう付け加える。「かつて戦争は開始すれば困難が明確になると捉えられていた。しかしそれでも、この見解の変化をもたらす、目に見えないものの広く行き渡っている要素（摩擦）を表現するのは極めて難しい。戦争においては全てが極めて単純であるが、最も単純なものこそ難しいのである³⁵。」

³³ この理由の大部分は、疑いなくマーシャルが海軍側カウンター・パートであるキングと親密な関係を築こうと努力したことと関係があり、そして、少なくともキングはこの努力に報いたのである。おそらくキングは、海軍だけでは太平洋の戦いに勝利できないということと、陸軍の支援が必要なることを理解していたのであろう。

³⁴ Clausewitz, *On War*, p. 119.

³⁵ Clausewitz, *On War*, p. 119.

このように米国の大戦略は明確に表現されている。政策立案者、戦略家及び司令官が望んだことと戦闘の現実や政治的圧力との相違により、彼らはまさに最初から受け入れ困難な行動計画に対処し、時としてこれを選択せざるを得なかった。行動と目標を持った敵は、常に事の成り行きに発言権があった。こうした現実は全て、極めて明瞭に 1942 年の米国の戦略展開や主張・討論に示されている。1942 年初頭、マーシャルと彼の陸軍参謀（陸軍航空部隊の作戦立案者から熱烈な支持を受けていた）は、1943 年の初めまでに米軍に欧州大陸への進攻を準備させることを目標とした。

しかしながら、直ちに同盟政策の現実、内部の政治的圧力及び戦場の現実が邪魔した結果、戦略の優先順位を変更した。真珠湾攻撃は、人種的優越性に関する米国の考え方にかんがりの打撃を与えた。さらに悪い事態がこの真珠湾攻撃に引き続いて生じた。米軍のフィリピン諸島防衛が修羅場へと化している間、日本軍がウェーク島とグアム島を占領した。それは、マッカーサーの浮き沈みの激しい軍歴の中で最悪の時期であった。その間、日本海軍及び上陸作戦部隊は、東南アジア各地で快進撃を行い、香港、マラヤ、オランダ領インドネシアおよびビルマは機軸の熟した一列のドミノのように陥落した。1942 年 5 月までに日本軍は、ニューギニア、ソロモン諸島、そしてサンゴ海に迫っていた。もはや、「ドッグ計画」に示された太平洋での単純な防衛態勢の維持は不可能であった。

米国とその軍隊は、日本軍のこうした成功に対応せざるを得なかった。日本の連戦連勝に対する米国内の怒りと不満は危険な域に達しつつあった。世論の圧力が「ドイツ優先戦略」を覆すおそれがあった。その結果が、1942 年 4 月の東京を初めとする日本各都市に対するドーリトルの空爆であった。今度は、この空爆により日本の最高司令部が動かざるを得なくなったため、これがミッドウェイでの米海軍の大勝利に直接貢献した。こうした日本の戦略上の混乱により、キングは第一海兵師団をガダルカナル島に投入できた。このように、1942 年秋から 1943 年初めにかけて、日本の軍事力を大きく消耗させることを目的としたソロモン諸島及びニューギニアでの軍事作戦が開始された。

米国の戦略家は、米国が「ドイツ優先戦略」を実施するまでに日本軍を食い止めなければならないという現実と直面したのとほぼ時を同じくして、英国問題に直面した。単純化して言えば、英国はフランス及び北アフリカでドイツ軍と戦った経験から、「第 2 戦線」である 1943 年の北ヨーロッパへの進攻を回避したかった。まして 1942 年ではなおさらであった。英国にとって、北ヨーロッパ進攻を成功させるためには、地中海及び東部戦線における戦闘の圧力によってドイツ軍を疲弊させる必要があった。今日振り返ってみると、この判断は正しかった。つまり、北ヨーロッパ進攻は近い将来、西側の連合軍が政治的・軍事的に実行できる可能性はなかったのである。しかしながら、米国の戦略家はそう考えてはいなかった。

一方、キングは彼自身の問題を抱えていた。驚くべきことではないが、この海軍作戦部長は太平洋での戦線崩壊を阻止することにほぼ全神経を集中していた。キングは、米国東海岸及びカリブ海におけるドイツ軍Uボートの脅威にほとんど関心を払っていなかった。1942年初頭にはこうした領海で、デーニッツと彼の指揮下の潜水艦は、「ドラムビート作戦 (Operation Drumbeat)」で英国及びソ連への重要な物資供給ラインに大損害を与えた。1942年晩春から初夏にかけてようやく、また英国、ルーズベルト、マーシャルから強い圧力を受けて初めて、キングと米海軍はこの状況を完全に把握するようになった。連合軍にとって幸運だったことは、ドイツのUボート作戦は想像力に欠けるもので、技術的に杜撰、そしてデーニッツに権力が集中しすぎている事実である³⁶。それにもかかわらず、米海軍が米国東海岸沖の領海を保護することについて英国から学ぼうとしなかったことは許し難い事実であり、これは直接、キングの太平洋偏重方針の影響であったのである。

米国の戦略家にとって最も重要な戦略的決定は、1942年夏に到来した。米国の軍事力をフランス領北アフリカへの進攻に投入する確約、すなわち「トーチ作戦」である。キングとマーシャルは、理由は異なるとはいえ両者ともこの作戦に真っ向から反対した。もちろんキングは、「トーチ作戦」を、南太平洋で難局にある自身の部隊から最も重要な海軍力の一部を引き上げるものと考えていた。1942年秋、南太平洋では日本軍がガダルカナルの第一海兵師団を今にも制圧しそうに思えることがあった³⁷。マーシャルが反対したのは、1943年に北ヨーロッパに上陸することで「第2戦線」を構築することを考えていたからであった。1942年に米軍を地中海に投入すれば、1943年のフランス海岸への上陸作戦のために米英が十分な軍隊を構築することができなくなるとマーシャルは恐れていたが、ルーズベルトは全く異なる方針をとった。米国は2つの理由により1942年にナチス・ドイツに対して陸軍力を投入しなければならないと主張した。第一に、このような兵力投入は、ソ連を、とりわけその陸軍が1942年夏に再びドイツ機甲部隊の猛攻撃を受けている時、戦争に踏み止まらせるために必要であった。だがさらに重要なことには、ルーズベルトは対ヒトラー戦争の根底にある米国世論を維持するためには、米軍が欧州のどこかでドイツ軍と実際に交戦しなければならないと確信していた。

歴史家はしばしば、チャーチル首相とその軍事顧問の間で激しい議論が戦わされたことを書き記しているが、チャーチルは一度たりとも彼らの意見を却下しなかった³⁸。一方、ルーズベルトと彼の軍事顧問との関係は、表面的には穏やかに見えた。しかしなが

³⁶ そしておそらく最も重要なことは、日本海軍が太平洋で米国の海上兵站ラインに対してその潜水艦を用いなかったことであろう。ドイツ軍のUボート作戦展開に関する弱点については、Murray and Millett, *A War to Be Won*, pp. 259-260 を参照。

³⁷ そして実際、制圧された。最新鋭戦艦マサチューセッツは、ソロモン諸島で生死を賭けた海戦が行われていた時、モロッコ沖の上陸地点を支援していた。

³⁸ こうした議論については特に、Alex Danchev and David Todma, eds., *Field Marshall Lord Alanbrooke, War Diaries, 1939-1945* (Berkeley, 2001) を参照。

ら、北アフリカ上陸作戦についてはルーズベルトは介入し、マーシャルとキングに対して、彼らの戦略的信念はどうであれフランス領モロッコ及びアルジェリアの海岸に上陸する「トーチ作戦」を実施するよう命令した。今日振り返ってみるとこの決断は、米国の作戦上の指導者がこの戦争で下した最も重要な決断であることが判明する。1942年から1943年を振り返ると、米国陸軍部隊は欧州でナチス・ドイツ国防軍と対決するどころではなかった。米軍は、1944年6月6日以降に実施されることになる恐ろしく生死を賭けた戦いの準備のために、チュニジア、シシリー島及びイタリアでの戦闘に熟達するのに1年を必要としたのである。

現実世界の戦略 1943年

1943年は、ルーズベルト、マーシャルそしてキングがアメリカでの戦略指針についてより強固な見解の統一ができた年となった。今回は、英国との論争が起きた。1943年1月にルーズベルト、チャーチル、そして各々の軍事顧問のトップがカサブランカで会談し、この年の共同の世界戦略を調整した³⁹。米英両国とも、ドイツ国民及び産業設備に対する戦略爆撃作戦を導入することに快く同意した。ドイツ国民への攻撃は英国空軍の爆撃司令部が担当し、産業設備に対する攻撃は米第8空軍が行う予定となった⁴⁰。しかしながら、担当空域以外に米英間で深刻な論争が起こった。英軍は、地中海にその最大限の軍事活動を集中させたかった。彼らはこの方針を直接主張しなかったが、おそらく1945年まで英仏海峡を横断する進攻を延期して、引き続き1944年まで英米の戦略の焦点を地中海に置くことを望んでいたことを示す証拠がある。

米軍はこれを認めなかった。1944年のフランス海岸への上陸が連合軍の戦略目標でなければならないと彼らは確信していた。そうでなければ、対日戦争だけに集中する計画であった。1943年1月、英軍の地中海重視政策が相当な意味を持っていた。北アフリカ進攻とシシリー島占領の結果、地中海が連合国側の商船輸送に利用できるようになり、400万トンから600万トンの輸送ルートを確保することになった。さらに、南イタリアを占領した結果、米軍爆撃機がバルカン半島及び東欧各地の目標を攻撃できる基地ができた。こうして、戦略爆撃の対象範囲がかなり拡大した。北西ヨーロッパへの進攻は1943年の最終手段に入っておらず、また、連合軍がとりわけ必要とした軍事力が既にこうした作戦地域に配備されているため、そのような目標を達成することこそ理に

³⁹ 第二次世界大戦中、枢軸国側の全体戦略についてこのような慎重かつ詳細な議論は、イタリア、ドイツ及び日本の指導者間で行われなかったことは特筆に値する。むしろこの枢軸国3ヶ国は、それぞれ別個の道を歩み、実際に決定が行われた後になって初めて親切にも互いに相手国に通知するのであった。

⁴⁰ 残念ながら、英軍の戦略爆撃作戦と米軍のそれとの協力の程度は、1943年から1944年の間、必要とされた協力がなされなかった。詳しくは、Murray and Millet, *A War To Be Won*, Chapter 12を参照。

適っていたのである。

カサブランカ会議が終了するまでに米英の戦略家は、一連の妥協案を打ち出した。米軍は、太平洋での軍事作戦を継続し、年末までに日本の占領地域の中核に2つの大規模攻撃を開始する⁴¹。こうした作戦は一見、「ドイツ優先戦略」を損なうように思えるが、2つの要因の表れであった。第一は、米海軍の大建艦計画がまもなく完全稼働に達するのであるが、その建造の大部分を占める航空母艦と戦艦は、欧州での戦争とは無関係であった。第二に、米国世論の関心は、今でも日本に真珠湾の報復をすることに集中していた。この問題の必然的結果として想起されるべきは、マッカーサーを自身の戦域で完全に手一杯にしておくことで、米国政治の「危険水域」から可能な限り遠ざけておきたいという願望である。当然、カサブランカ会議で新たに太平洋作戦が承認されたことを考えると、キングは満足して同地を後にすることができた。

マーシャルは不満であった。マーシャル及び米陸軍戦略家の見解では、カサブランカ会議は成功ではなかった。ある英国の立案者は、「仮に私がカサブランカに到着する前、会議の結論を自身の希望するように書き記していたとしても、これほど大雑把で包括的、そしてこれほど我々の考えに都合の良いものは書けなかったであろう」と述べている⁴²。一方、米国側参加者は、「我々は大損をした・・・(中略)・・・。我々は、来て、聞いて、そして征服されたと言えるかもしれない」と記している⁴³。カサブランカでの合意により米軍は、北アフリカを奪回するだけでなくシシリー島、そしておそらくイタリアへも進攻することになった。英軍は北西ヨーロッパに進攻することに合意したが、この作戦のための特別な目標期限は設定されていなかった。米軍の立案者は、作戦における英国側のいい加減な表現について一層の不満を抱いた。「ドイツ優先戦略」は崩壊したように思えた。1943年に米軍は、地中海戦域より太平洋にはるかに多くの軍隊を派遣した⁴⁴。

さらに、米国側は全般的に、英軍の業務は自身の準備よりはるかに優れており、英国の事務処理は聡明な米国側の見解を圧倒したと感じながらカサブランカを去ったのである。この戦略的対立の影響は、少なくとも将来にとってかなりのものがあった。長期的には米軍の反応は、戦略的課題を分析するシステムを構築することにつながった⁴⁵。実際、カサブランカでの英国側の戦略分析方法との対決が、米国政府及び米軍が冷戦時代

⁴¹ この状況にはかなりの皮肉が含まれていた。というのは、米国の戦略家は英軍のナチス・ドイツとの取引という二股アプローチを批判したが、彼らは、主として政治的理由から太平洋で二股アプローチを行うことになったのである。

⁴² Stoler, *Allies and Adversaries*, p. 103 から再引用。

⁴³ 同上。p. 103。

⁴⁴ 忘れてならない事実として、1943年に米国内で訓練された軍人の大多数は、1944年の北西ヨーロッパ進攻に当てられたことが挙げられる。こうした部隊を北西ヨーロッパ進攻時期直前まで英国に派遣することは意味がなかった。そして1944年、ひとたびヨーロッパ上陸作戦が開始されたら、この部隊は米国から直接フランスに送り出されることになるのである。

⁴⁵ 米国政府内の分析戦略グループの発展に関する議論については、Stoler, *Allies and Adversaries* が優れている。

を通じてソ連が提示した難題への対応を策定するプロセスと方法に多大な影響を及ぼしたと言えよう。

カサブランカ会議の不幸な結果の一つは、連合国側の、とりわけ米国の 1943 年の地中海戦略を制限する努力を米国側が続けたことであった。英軍の「二枚舌」に関する米軍側の理解できるがいわれの無い恐怖が、地中海での英軍の作戦計画に大きな疑いを抱かせたのである。これにより、少なくともチュニジアでのドイツ、イタリア軍の崩壊直後の大きな作戦上の機会を失ったのであろう。しかしながら、米軍にせよ英軍にせよ、地中海戦域の司令官（ドワイト・アイゼンハワー、ハロルド・アレキサンダー、バーナード・ロー・モントゴメリー、アーサー・テッター）は、北イタリア及び南フランス全域を脅かすための基地としてサルディニアとコルシカを奪取するリスク負担については支持しなかった。

米軍の戦略と終戦

1943 年末にかけて米国のフランス北西海岸への上陸重視政策が米英間の議論を圧倒した。ここで、米軍支援のためだけでなくソ連及び英国軍も支えるための米国の大規模な増産体制は、ルーズベルトとマーシャルの同盟国の戦略決定における発言権を決定的なものにした。トライデントとクワドランツでの会議でマーシャル、キング、そして両者の顧問は、英国に最終的に「オーバーロード作戦」と呼ばれることになる上陸作戦の日程を決定することに同意させた。ウィンストン・チャーチルと彼の軍事顧問のトップであるアラン・ブルック将軍（帝国総参謀長）の疑念がいかなるものであれ、1944 年春には「ヨーロッパ要塞」の海岸に上陸することになるであろう。最も経験豊富な米英の司令官が、1943 年から 1944 年の冬、地中海から英国に移動させられるということは、米国のドイツ優先という考え方が今では連合国軍の戦略で優位を占めていることを最も的確に表していた。

この時点でキングは、あまり強く「太平洋優先戦略」を支持できなくなった。米海軍の大量建艦の大部分が欧州での戦争に不向きであっただけでなく、欧州大陸でのナチス・ドイツとの対決の場合に比べて太平洋での島々を飛び越える作戦という性質上、日本を撃滅させるためにより少ない陸軍力が必要であった。最後の大きな戦略上の論争は、1944 年初頭に起きた。この時、アイゼンハワーとモントゴメリーは、提案された 3 つの個師団での北フランス上陸では不十分だということを明確にした。「D デイ」に必要な作戦部隊数を 5 個師団をはるかに上回るまで増強した結果、それに付随する上陸用舟艇が必要となったが、その建造分は主として太平洋に向けられることになっていた。ここで、英国が介入し、英国内の造船所で必要な総トン数の大半を建造することになった。

第二次世界大戦の戦略的枠組みに影響を及ぼす戦略的議論は、その他にも存在した。戦略爆撃の実行者は、ナチス・ドイツ国防軍の「ヨーロッパ要塞」防衛能力を麻痺させるため、フランス内で輸送網に対する作戦を実施する旨の命令を甘受せざるを得なかった。この時、チャーチルとルーズベルトは、「オーバーロード作戦」が英米両国の戦略的最優先事項であることを明確にし、その結果、アイゼンハワーが連合空軍全体の指揮を担当することになった。残された一つの論争は、海軍による艦砲射撃に関するものであった。太平洋作戦からの教訓では、こうした支援が上陸作戦部隊の上陸を成功させるために必要不可欠であるということであった⁴⁶。この第二次世界大戦を通じて最も重要な作戦において、米英連合軍は可能な限り最大限の艦砲射撃を予定したであろうと考える読者もいようが、実際はそうではなかった。

しかし、上陸部隊の司令官であるオマール・ブラッドレー将軍は、太平洋戦域での経験を完全に無視していることが明らかになった。ブラッドレー及び彼の海軍顧問の助言によると、太平洋は「二流の」戦争ということであった。仮にブラッドレーとアイゼンハワーが当時の太平洋で戦艦に多大な海軍支援を要請していたとしたら、確実に生起していたであろう戦いについて想像するのも興味深いことである。確かに、キングは間違いなく拒否したであろうから、この論争はおそらく大統領まで達したであろう。しかしながら、結局キングはこの争いに負けていたであろう。

この戦争が終結に向かって次々とハードルを飛び越えるにつれて、2つの要素が今や米国の戦略を推進することになった。第一は、戦後についてのソ連の意図に対する恐れが深まったことであった。スターリンの意図についてのこうした危惧は、米国の戦略家、とりわけソ連との交渉に当たらなければならない者では一つの潮流となったが、まだ大きな焦点ではなかった。ルーズベルトは、その人生の最後の数ヶ月間に、ソ連の行動にますます悩まされるようになったが、亀裂が生じそうに見えるほどではなかった。しかし米軍にとって、日本本土進攻の可能性を考慮して、対日戦争におけるソ連との協力の可能性はまだ魅力的なものであった。戦後、ソ連の東欧での行動により、欧州再建に協力する意図がないことが判明してから、この同盟関係は崩れ始めた。

次第に明らかになってきたその他の大きな戦略上の問題は、戦争終結に関する問題であった。ドイツの場合、連合軍の陸軍及び空軍が、1944年から1945年冬が終わるまでにはナチス・ドイツ国防軍の継戦能力を破壊した。戦争は、地上での敗北と戦略爆撃によるドイツ産業の壊滅的破壊が組み合わさり、ドイツの全体的・体系的な崩壊に終わったため、ドイツ本土での「神々の黄昏」はなかった。1945年5月初旬、ドイツは降伏し、欧州での戦争は終結した。

日本は別問題であった。硫黄島と沖縄での凄惨な死闘と、それに伴う「神風攻撃」は、

⁴⁶ 1944年3月のクワゼリン島上陸作戦では、少なくとも米戦艦7隻の支援を受けた。この7隻の多くは、真珠湾での大惨事から修理・再編制されたものであった。

日本本土への進攻は欧州東部戦線での戦闘に匹敵する流血の戦いになる可能性を示唆していた。1945年初夏までに「オリンピック作戦」の立案はかなり進んでいた。最初の攻撃地点は九州の予定であったが、米国の立案者は、7月下旬までには兵士50万名に迫りそうな勢いで膨張する日本軍の守備隊の存在を知り不安を募らせていた。

実際、このような状況において軍事的・戦略的観点から、原子爆弾を使用すべきか否かについての質問は一切なされなかった。原子爆弾そのものは、ナチス・ドイツに対して使用する目的で開発されたのであるが、ドイツ軍はそれが使用される前に降伏した⁴⁷。米国新大統領ハリー・S・トルーマンは、第一次世界大戦に出征した経験があり、日本に進攻すれば米国兵の死傷者数の予想が何を意味するのかを完全に理解していた⁴⁸。ルーズベルトの死後、新大統領の主要な顧問になっていたマーシャルとキングも同様であった。「マンハッタン計画」に参与した科学者の中には、日本に対してこのような兵器を使用することの道義を問う声があった。一方、デモンストレーションしてみてもとの意見もあったが、意思決定の過程を経て、結局、原爆を投下する以外に選択肢はないと決定された。

今日振り返ってみると、原子爆弾は、広島及び長崎の住民たちが受けた恐るべき死傷者数を考慮しても、米国民と日本国民の双方にメッセージを伝える役割を果たしたのかもしれない。あの2発の原爆は、米軍が1945年11月1日に九州に上陸していたら、同地で起こっていたと思われる恐ろしい大惨事を確実に防止したのである。しかしながら、たとえ日本政府が帝国陸海軍にどうにか状況が絶望的であることを認めさせたとしても、B-29爆撃機が設定している次の攻撃目標は、日本の輸送網であった。このような軍事作戦が実行されていたら、その結果として日本全土に夥しい餓死者が出ていたであろう。なぜなら、日本の降伏後、占領軍には日本の港湾に送られてくる救援物資を輸送する手段がなかったであろうからである。結局、広島と長崎は核戦争に付き纏う残酷な記憶として冷戦時代を通じて米ソ両国の政治家に抑止力として役立ったのかもしれないということも記しておく必要がある。

おわりに

大部分において、第二次世界大戦での米国の戦略はルーズベルト、マーシャル、そしてキングという非凡な人物が決定したのである。ルーズベルトは政治家としての務めを

⁴⁷ しばしばゲールハルト・ワインバーグは、ドイツ軍司令官の回顧録などを読むと、「もしヒトラー総統が私の意見に耳を傾けてさえいたら・・・」というようなことが書かれていることを指摘している。そして、こうしたドイツ軍司令官が自身の発言の論理を一貫させていないことも付言している。すなわち、「この戦争は、もう1年続いていたであろう。そして、米軍はドイツに原爆を投下したであろう。」

⁴⁸ フランクリン・ルーズベルトなら原爆投下の戦略的・政治的必要性についてトルーマンと異なる態度をとったであろうと信じる理由は存在しない。

果たしながら、早急かつ常に可能なことと必要なことについての明確な洞察力をもって、戦略を遂行した。彼は、2つの戦線の戦いとして第二次世界大戦を戦うことが極めて重要であることを認識しており、彼の「トーチ作戦」を支援するという決定は、同大戦に米国が行った重要な戦略決定であった。マーシャルの関心と陸軍戦略家の努力は、同大戦を通じて常に欧州に注がれていた。キングにとっては、「ドイツ優先戦略」は海軍の伝統的な日本重視からの敗北を意味した。それにもかかわらず、米国がこの戦争を戦わなければならない政治状況により米国の戦略家は、太平洋に重要資源を配分せざるを得ず、今度はこうした現実が、ほぼ同時に両戦線での戦争終結という完全に有益な効果をもたらしたのである。

皮肉なことに、第二次世界大戦における米国の勝利の教訓、すなわち世界規模で戦略を考えるのが必要であることは、戦後の時代において次第に薄れていった。「ドイツ優先主義」の支持者は戦後の米軍を支配し、彼らの見解こそが1945年以降、米軍の配備と態勢を決定してきたのである。もちろん、ここにある皮肉は、冷戦時代に米国がアジア地域において2つの大きな戦争を戦わなければならなかった点にある。仮に米国の政治家が、米国にとってのアジアの重要性をより明確に認識できるグローバルな見方を重視していれば、朝鮮戦争およびベトナム戦争は阻止することができ、また、犠牲者数も軽減していたかもしれない。